

第1話

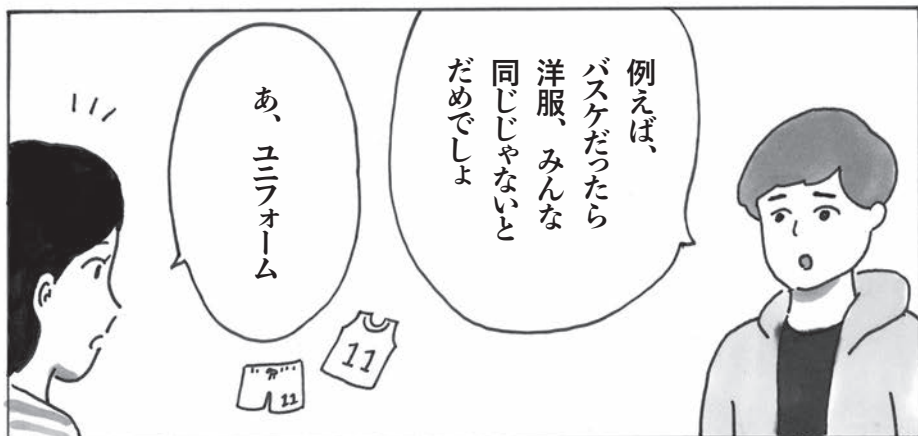
おしゃべりするのは誰のため？

パターンA











第①話 おしゃべりするのは誰のため?

タスク1 パターンAとパターンBを読み比べて、何が違うか話し合しましょう。

タスク2 パターンAの先生は、親切だと思いますか。なぜですか。

タスク3 パターンAとパターンBとでは、学習者の発話に違いがあります。
こうした発話の違いは、どのような理由で生じたと思いますか。

第①話について

このお話には、学習者の話題をつかまえてどんどん話す先生（パターンA）と学習者の発話にあいづちを打つ程度の先生（パターンB）の二人が出てきます。こういった先生の方針の違いに気づいてもらうのが、最初の質問の意図です。

続いて、パターンAの先生は親切でいい先生だと言ってしまうのかどうかということを考えるのが、2番目の質問です。「学習者はそんなに話せないのだから、話題をつかまえてどんどん話すのは親切でいい先生だ」という意見もあるでしょう。もし、「それは違う」という意見があるとすれば、どんな意見かを話し合っしてほしいと思います。

最後に、パターンAとパターンBを学習者の発話に注目して改めて比較してもらおうのが3番目の質問です。2番目の質問とも連続しますが、おしゃべり型の活動^{注1}の「目的」は何なのか、そこにどんなコツが隠されているのか考えてほしいと思います。「説明ではなく質問をして発話をうながす」、「学習者の発話を待つ」、「自分だけが

話しすぎない」、「あいづちを打ったりうなずいたりする」、「がまん強く、根気強く」、「短い文で言い直す」、「できるだけ簡単な言葉に言い換える」など、おしゃべりといってもさまざまなコツがあります。専門的なことではありません。「相手に気持ちよく話してもらおう」という目的さえ外さなければ、日本人相手で行っている同じようなおしゃべりの経験が外国人相手でも十分に活かされます。

研究では、先生の発話量と学習者の発話量が近くなると、相手に好印象を持ちやすくなるという結果も出ています。また、先生の発話が短かすぎると、単語だけのやりとりになってしまい、学習者の発話も短くなってしまいうという結果も出ています。何事もバランスが大切だということなのです。

（森篤嗣）

注1 「おしゃべり型活動」とは、日本語の文法などを「教える」のではなく、日本語ボランティアと学習者で自然な会話を行うことで、聞き取り能力と発話能力の両方を知らず知らずのうちに伸ばしていくというものです。